



キャンパス点描——1号館



1号館は文学部キャンパス内に現存する建築物としては一番古い。昭和12年



第16号

2021年
12月25日発行

日本大学国文学会

同窓会誌



（一九三七）に日本大学予科の校舎として落成。リフォームを繰り返し、現役であり続ける。かつては授業で使いたくない校舎・教室の一つに数え上げられていた時代もあった。現在は設備も改善され、教室や事務室として活かされている。今年で84歳。時々延命措置が施され、あえて残されてきたことの意味を今よく噛みしめてみたい。

OB・OGだより

私の下関、名所案内

倉光 洋子

関門海峡の景観が一番好きだ。北九州と下関を結ぶ人道トンネルは、私の生まれる前から、自転車や徒歩で海の下を通って行きてできるようになっていた。それほど門司と下関は近い。さすがに海の難所だけに、泳いで渡るのは無理だけど、距離としたら十分泳いで渡れるらしいのだ。明治の頃のことになるうか。その近くにあった畳屋を営む祖父と思われる人は、対岸を歩いていく人が誰なのか見分けることができた、と聞いている。IT機器の普及で眼を酷使しがちな現代人の多くは、そうした遠くを見る能力などつくに失ってしまっている。

そんな小さな海峡も歴史は古い。有名なのは「源平合戦」に「下関戦争」の古戦場で、まさに「兵どもが夢の跡」である。交通路は、人道トンネルのほかに、車や電車、新幹線のトンネルもあり、私の生まれた頃に架かった関門橋は、当時としては最新の技

術で作られ話題となり、人気の観光地となった。こうして海底トンネルや橋梁のお蔭で私の故郷は魅力を増した。

「ブリッジ」という名の海峡と関門橋を望める喫茶店で、船の汽笛を聞きながら飲むコーヒーは、至福の一時を運んで来る。下関観光に来られる方にはお薦めの名店。観光バスや自家用車を利用したら、下関インターチェンジ内の休憩所からの眺めが絶景だ。特に春、桜の花越しに眺める関門橋は最高で、タイミングが良いと駐車場の藤棚の花も同時に咲き、まさに花盛り。暖かい日差しと相まって春を満喫できる。

〔平成13年文学専攻（国文学）卒業〕

言葉と向き合う

片桐 悠

私は今、都内の高等学校で教員として働いています。毎朝、生徒に「おはようございます」と声を掛けることから始まる生活にも慣れ、充実した日々を過ごしています。

教員になったばかりの頃も、現在も、言葉とどう向き合うかについてよく考えます。とくに生徒たちとのやりとりは試行錯誤の

繰り返しです。そんな時に思い出すことは、私がお世話になった先生方の言葉です。

高校生の頃所属していた文芸部では、詩の創作に凝っていました。教室では目立たないタイプでしたが、詩の創作を通して、顧問の先生から「面白い言葉を選ぶね」と誉めて頂き、自信を得ることができました。当時、憧れていた古典の先生からは「憧れを作ってしまうと成長が止まってしまう。あなたらしく教員を目指しなさい」と励まして頂き、今もその言葉を大切にしています。採用試験が上手くいかなかった時には、教職指導室の先生から頂いた「冬来たりなば春遠からじ」の言葉を胸に、何とか乗り切ることができました。

現在は、生徒や同僚に助けられながらの毎日ですが、なかでも、卒業式の時に生徒から「先生と出会えて良かった」と告げられたその一言は、私の宝物となっています。

言葉というのは、たとえさり気なく発せられたものでも、それを受けとめた本人にとつては、かけがえのない大きな意味や力をもつことがあります。これからも、言葉と向き合うことを大事にし、仕事に臨んでいきたいと考えています。

〔平成23年国文学科卒業〕

心の支え

小角 千尋

小さな影が何度も振り返る。時折駆け戻って涙をこぼしては、思いを託して離れていく。中学校教諭としての日々が頭を巡る。この春私はひとつの節目を体験した。

とにかく必死に働いた。靴も脱がずに玄関で眠ったことが何度もある。そんな私の心を支えたのは、やはり生徒の存在だった。

私が国語に魅了されていることを、生徒は誰よりも知っている。語り出すと「来たぞ」とでも言いたげに、にやにやし、うわの空だった子もじつと耳を傾ける。「もっと教えてほしい」だなんて持ち上げられた日にはつい余談が増える。しかしある時、読書が嫌いだと豪語していた子が、紹介した作品をペラペラめくっている。心の中でぐつとガツポーズをする瞬間である。

生徒の言動のひとつひとつ、その裏側に隠された思いを見つけられるよう懸命に向き合う。未熟ながらも努力してきた結果は子どもたちが見せてくれた。大きく成長した姿と、身に余る嬉しい言葉。これまでの苦労なんてどうでも良くなる程の感動を残して、子どもたちは卒業していった。

さて、暫くの間この仕事から離れることになった。久しぶりの読書。文学を学べる幸せがふつふつとこみ上げる。今度教壇に立つたらこの話をしよう。並んだにやけ顔は次第に変わる。話に飲み込まれる姿に今度はこちらが頬を緩める番だ。楽しみな気持ちが伝わったのか、お腹がぼこりと動く。深い深い愛情をお腹の中に届ける。別れ際、愛おしい教え子たちがしてくれたように。

〔平成31年国文学科卒業〕

長野時々埼玉、ところにより愛知

平沢 颯太

長野生まれの埼玉育ち、現在は名古屋でインターネットの回線や機器などの販売営業をしている。当地とは縁もゆかりもなく、ただ就職先があるというだけの理由で住むことになった。まずは鉄道網の複雑さに惑わされた。JRに加えて地下鉄、さらに名鉄と近鉄があり、なかでも名鉄が厄介で、一つのホームに複数の線がひっきりなしに入ってくる。新宿駅で例えれば、京王線と京王新線と小田急線とがまとめて一つのホームに乗り入れて来るようなものだ。そ

んな通勤事情にも半年後には慣れた。スマホも「乗り換え案内」ではなく、ニュースサイトを開くようになった。こうなればもういつかはの名古屋のビジネスマンである。赴任当初は、複雑な鉄道網と慣れない仕事に辟易していたが、名古屋に来て良かった点がひとつある。それは長野の実家に帰りやすくなったことだ。特急で2時間弱、車でも3時間ほど。休みを利用しては実家へ戻って家族に会い、畑仕事を手伝うこともできる。祖母の様子をみる機会も増えた。数年前から患っていて、気掛かりだったからだ。その祖母もこの夏の終わりには眠るように逝ってしまったが、帰省の折々に言葉が交わせたことは何よりだった。

このところ仕事にも一人暮らしにも慣れてきたせいか、日々を徒に過ごしかけていた。そこで週に一度、記録をつけるようになった。それだけで一日の生活密度が濃くなったような気がする。今はこの記録を途中で投げ出さないことを目標にしている。

〔令和3年国文学科卒業〕



わたしの仕事

生命保険会社（営業員）



—リモート営業中—

将来について何も考えずに高校・大学と進み、あつという間に就職活動の時期を迎えた。それは三年次の一月のこと、周りがインターンやら面接やらに勤しむ中、炬燵で暖まりながら、ようやく自己分析を始めた。接客のアルバイトをしていた私は、ずっと座っている仕事より、人の反応が直接見られる仕事が良いだろう、といった漠然とした理由で営業職を目指すことにした。その程度のこころざしだったから、就活中、面接官からは志望動機をめぐって何度も詰問されることになった。ともかく、業界を

絞らず、片っ端から営業職のエントリーシートを出し、結局、一番最初に内々定が出た会社に勤めることになった。

現在は、昼休みを利用して所定の企業へ出向き、個人を対象とした生命保険の販売をしている。もしもの時にどのくらいの費用が必要になるのかは、年齢や家族構成、今後のライフイベントによって異なるから、丁寧に話し合いを重ねながら、より適切な保険を提案していく。

「晴れた日に傘を売る仕事」ともいわれる通り、若い人や健康な人、今まで大病や怪我などしたことがない人に保障を持つことの重要性を訴える必要がある。これがなかなか一筋縄ではいかない。いざ大病を患った時など、慌てて貯金を切り崩して治療費に充てたりするものだが、その後は保険加入ができなくなることが大半なので、肝心なことはしっかり伝えなければならない。

どんな仕事でも辛いことや大変なことはあるだろうが、この仕事をしていてもっとも辛く感じるのが、被保険者の悲しい出来事にも向き合っていかなければならないということだ。どんなに健康であっても、突然に怪我をしたり、病気になったり、誰にも予測できないことが起きる可能性がある。そ

こに保険加入の意味がある。とはいえ、金銭的なことも大事だが、この仕事の醍醐味は、加入者の人生に寄り添いながら共に歩んでいけるような仕事だと実感できるところにある。一方、保険の営業は大変そうだとか、顔を見れば勧誘されそうだとか、よくいわれる。営業ノルマが厳しいという印象はいまだ根強いようだが、昨今の保険会社は営業文化の刷新に努めているため、当面の目標はあつても、それが達成できなかったからといって叱責されるようなことはない。むしろ自由のびのびと働いている、というのが実際かと思う。

振り返れば、内定直後は、周囲に自分の就職先について話すことに抵抗があった。しかし、上司や先輩・同期に恵まれ、多少なりとも経験を積んだ今では、胸を張って保険の営業員であるといえるようになった。これからも誇りを持って仕事にあたり、信頼される人間になれるよう努めていきたい。

青島 俊恵 あおしま しゅんえ 平成9年4月29日生まれ。
令和2年3月国文学科卒業。卒論は十返舎一九の『清談峯初花』について執筆。飲み会やデイズニーをこよなく愛する。緊急事態宣言下では居酒屋に行けず、苦しい思いをした。

談話室

土岐善麿晩年の色紙

大伏 春美

土岐善麿（一八八五～一九八〇）は歌人として知られるが、日本の古典文学の研究者、随筆家、ジャーナリストなどとして幅広く活動した。国語審議会にかかわり、現代仮名遣いや当用漢字（現在の常用漢字）への移行に尽力した。母校の早稲田大学等で教え、一九六五年から一九七八年、八十歳から九十三歳までは武蔵野女子大学（現・武蔵野大学）日本文学科の教授として教壇に立ち、私も受講した。

土岐の歌、

ここに学ぶとはじめて立ちし校庭の花の四月の 初心忘るべからず

は、毎年入学式の頃、正門のそばの掲示板にはり出される。新入生を迎える学園にふさわしい歌であり、毎年見る教職員の心にしみ、情性に流されがちな日常への反省を促す作となっている。またこの歌はどここの学校にもふさわしいと思われる。

土岐の色紙は数多くあるが、『近作百首墨韻』（一九七七年六月 蝸牛社）でまとめて見ることも可能である。同書には冷水茂太の翻字と短歌の解説も付されている。

このような土岐であるが、私は縁あって、孫の有田由子氏（長男健児氏の長女）から土岐の文学関係の資料について相談を受け、日本近代文学館への寄贈のお手伝いをした（二〇二〇年十一月）。土岐の色紙などを寄贈前に手に取って見ることができて幸せであった。土岐と近代文学館の関係といえは石川啄木の資料の寄贈が知られているが、一九七八年に同時に土岐自身の資料（著書、原稿など）も多数寄贈している。今回の有田氏の資料も、土岐善麿コレクションの追加とされた。

なお、日本近代文学館には曾根博義教授（二〇一六年没）の膨大な図書が寄贈され曾根文庫となった。また紅野謙介教授も理事として活躍中である。

土岐の色紙の歌を少しあげる。改行は／で示した。

春のひかり／千里を照らす／空のもと
われは一隅に／身を守るべし

（周辺）一九七五年四月
ガラスを／へだてて／いづれか早く／

さく花ぞ 卓上の梅 窓外の梅

（周辺）一九七三年十二月、『寿塔』52ページ
米寿を越え／万里長城へも／登れりと
／路の残雪に／刻みおくべし

（『寿塔』30ページ）

土岐の三度目の中国訪問は一九七三年二月、八十八の米寿^{（べいじゅ）}を過ぎて九十二歳だった。

「和」と「遊」と／ 試筆の一字ことし
新たに／さらに何を求めゆくべき

（周辺）一九七九年三月

色紙に「遊」を書いたものがあるが、しんにゅうの最後が上に弧を描き、遊び心が感じられて楽しい。

右の歌の初出を知りたく「周辺」を見た。この雑誌は周辺の会が発行しているが、一九七二年の一卷一号から一九八〇年の九巻一号まで、土岐を中心に発行され、終刊号の九巻二号（一九八〇年十一月）は追悼号である。土岐は随筆や短歌を載せていた。

わがために一基の碑をも建つるなかれ
／歌は集中にあり／人は地上にあり

この歌は土岐の葬儀の会葬御礼の封筒にも入っていて、歌碑を建てることを拒絶している。高潔な生き方の人物である。

〔徳島文理大学名誉教授〕



「読んでいない」ことを 恥じないために

武内 佳代

読

書

案

内

演習の授業で、学生たちが自らの読書量を恥じて発言に臆する様子をよく目にするところがある。ましてやゼミの課題本を「読んでいない」ようなとき、その顔は俯き、発言など絶対にしようとはしない。確かに気持ちにはわからなくもない。私自身、これまで自分の読書量に恥じ入り、「読んでいない」ことに背筋が寒くなる思いをしたことが何度もあった。

たとえば恥を忍んでいえば、紅野謙介先生が近年精力的に研究されている中里介山の『大菩薩峠』を読んでもおらず、内心冷や汗をかいたことがある。市川雷蔵が好きで映画こそ観ていたものの、あの長大な時代小説を「読んでいなかった」私は、ここ文理学部に着任してからコッソリと、古書店ですでに絶版となっていたちくま文庫の『大菩薩峠』全二〇巻を買い求めた。ただし今のところ、「いつかは」と思いつつ、これらの本は本棚の片隅から動いていない。しかしそれでも万が一、『大菩薩峠』についてコメントが求められた場合には、私は「読んでいない」ことを断りつつも、この小説について何らかの発言をしたいと思っている。そのような一見向こう見ずな行いに背中を押してくれるのが、ピエール・バイヤールの『読んでいない本について堂々と語る方法』（ちくま学芸文庫）である。

標題から際物のハウツー本かと思われるかもしれないが、そうではない。フランスの優れた文学研究者バイヤールが、文学作品や作家の言葉を分析しな

がら、真剣に「本を読むこと」について考え抜いたこの上ない一冊だ。

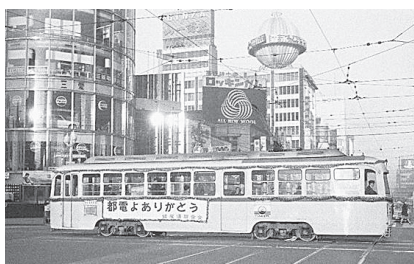
本書では、ろくに「読んでいない」本についてコメントしなければならぬ局面が、大学で教えるバイヤールにもたびたび訪れるという話にはじまり、そもそも「読んでいる」、「読んでいない」の区別がいかに曖昧なものにすぎないかが巧みに論じられる。私たちがある本をすでに「読んでいる」と言うとき、とくに印象に残っている部分はそれぞれ異なるだろう。そもそも、本の内容に関する読者個々人の理解や記憶したい、あてにならないかもしれない。あるいは、特定の本の内容を鵜呑みにし、かえって自らの思考力を停止させてしまうこともある。そう考えると、単純に「読んでいる」こと、すなわち読書量だけに価値を置くことは間違っている。

だからといってバイヤールは本を「読まない」ことを推奨しているわけではない。「自分自身に至るためには書物を経由しなければならないが、書物はあくまで通過点でなければならない」。つまり《読書》とは、読んで内容を正確に把握することを目的としたものではなく、あくまで自己探求や自己表現のためにこそある。だから学生たちには、きちんと「読んでいる」ことよりも、自分の考えを隠することなく主張することを重視してほしいと願っている。それこそが、まぎれもない《読書》の時間なのだから。

〔国文学科教員〕

1967年(昭和42年)

- 1月27日 米・英・ソが宇宙平和利用条約を調印
 1月29日 総選挙で自民党の得票率が5割を切る
 2月11日 前年制定の戦後初の「建国記念の日」
 3月 1日 北千里駅に日本初の自動改札機設置
 3月 6日 日本航空が世界一周線の運行を開始
 3月21日 金栗四三が54年8ヶ月6日5時間32分20秒3の記録でマラソンゴール
 4月16日 都知事に美濃部亮吉が当選し革新知事ブーム
 4月30日 『語文』第26輯刊行
 6月25日 日本大学国文学会総会
 8月 3日 公害対策基本法が公布
 8月10日 JCBが日本初の国際クレジットカードを発行
 10月 2日 ツイギー-来日しミニスカート流行
 11月 9日 米軍が押収の原爆記録映画が返還
 11月21日 小田急百貨店新宿店の本館が完成
 11月28日 学術研究発表会
 12月10日 都電の第一次撤去
 12月20日 『語文』第27輯刊行



名残惜しまれた都電

【学内外の動き】一月に付属の長崎日大高校が設置された。六月に国文学会が開催され杉山重行、塩敬、葉師寺章明、長尾勇、橋本不美男、井狩正司らの研究発表、陣峻康隆氏の「家康の文教政策」と題する講演が行われた。

【国内外の動き】ベトナム戦争が続く日本でも羽田事件など反戦運動があった。ナイジェリア内戦、第三次中東戦争、中国初の水爆実験もあった。その一方でヨーロッパ共同体（EC）や東南アジア諸国連合（ASEAN）が結成された。国内では自動車が一千万台を超え、車の増加による定時運行が困難となった都電は財政再建団体となりこの年より都電撤去（廃止）が始まった。また全就業者のうち農業人口が2割を下回った。モータリゼーションや産業の転換の一面である。

国文学科ヒストリー 16



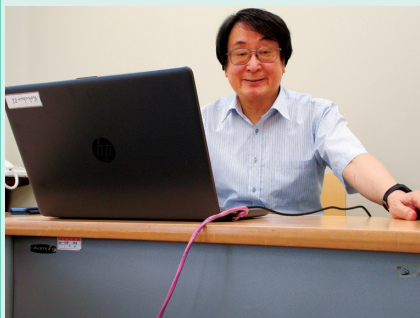
コスモスポーツ



リカちゃん人形

研究室訪問 一問一答

- ①一番嫌いな食べ物は何ですか。
ブロッコリー
- ②最近の大失態を教えてください。
駐車場を歩いていて躓き、もろに転倒した。
- ③おすすめの本を一冊あげてください。
灰原葉『応天の門』（平安京を舞台とした漫画）。
- ④蔵書の中で一番高価な本は何ですか。
『後鳥羽院御集』『明日香井和歌集』
- ⑤お気に入りの文房具を教えてください。
モンブランの万年筆（父の形見）
- ⑥最近嬉しかったことは何ですか。
ゼミ生の就活がうまくいったこと。



藤平泉（中世文学専攻）研究室

掲 示 板

国文学科短信

日本大学国文学会大会が7月10日(土)、オンライン方式で開催された。学外の学会もこの方式で乗り切ったところが多かった。大学関係ではオンライン方式が比較的すみやかに受け入れられたが、これはインターネットが普及し、個人の通信環境も整ってきていたからであろう。私たちににとっては、いきなり実証実験に取り組まれたようなものだが、この間の問題点については今後の検証が必要なことというまでもない。

11月に入ってウイルスの感染者・重症者が激減したことをうけ、授業も遠隔式から対面式へ転換する機会を窺っている最中である。

来年3月の卒業生を対象とした国文学科の卒業パーティーは、学生たちの意向を尊重し、開催しないことになった。3月の卒業式・学位記伝達式は前年度同様に感染対策を講じた上で実施されることになろう。

国文学科事務室短信

卒論・修論の提出(2部必要)は2022年1月11日(火)～13日(木)の間に済ませること(時間厳守)。郵送も認められているが、その方法と必着日に要注意。詳細は案内済みなので、よく確認して対応されたし。

文学部短信



上の写真は建設中の第2体育館。旧第2体育館は本誌前号の「キャンパス点描」でとりあげた。こちら新館は令和4年3月竣工予定。場所は3号館の真横で、短期間ではあったが、緑の芝生が広がっていた一画だ。かつて旧3号館と旧2号館が交差していた近辺と思われるが、在りし日の構内の様子を思い出すことは年々難しくなってきた。

今年度の夏・秋のオープンキャンパスと秋の桜麗祭はともにオンライン開催となった。

下高井戸商店街

一時期、開店ラッシュだったタビオカ専門店はこの一年半の間に全部撤退。実に短命だった。商店街はコロナ禍前と変わらない日常を取り戻しているように見える。これで学生たちがかえってくれば元通りなのだが……。

同窓会員募集のご案内(郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会)

国文学会では国文学科の卒業生(大学院・通信教育部を含む)を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円(2年分)から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

第16号

2021年
12月25日発行

〒156-8550
東京都世田谷区松上3-25-40

日本大学文学部国文学科
国文通信編集委員会

紅野謙介・鈴木功真・竹下義人
国文通信編集委員会

館内の資料館で展示が行われた。

(功)

編集後記

本誌では皆様からの投稿を随時受け付けています。エッセイのほか、同窓会の案内や報告なども歓迎します。詳細は本誌編集委員会宛、お問い合わせください。

電子メールは国文学科サイト内に設置してある「お問い合わせ」フォームから送信できます。感想などもお寄せください。

◆第16号をお届けする。原稿をお寄せいただいた皆様に御礼申し上げます。

あげる。◆鈴木晴彦先生が定年退職のあと国文通信の編集委員を引き継ぎ、「国文学科ヒストリー」を担当している。一九六〇年代はまだ生まれる前の話、何をどうまとめたらよいかわ、要約する能力を問われる。見返せば私の担当した第14・15号はヒストリー部分の字が小さい。要約できていない証だ。歴史として紡ぐことは難しいものだと思付く。◆巻頭の1号館は文学部で最古の建物、先日、図書館内の資料館で展示が行われた。